

「はじめての能舞台設計に関わって」

田野倉徹也（数寄屋建築家）

学生時代、淡路島に能舞台をつくり野外能公演を行った。若気の至りで設計した斬新な能舞台で、東京の能楽師による能「淡路」が演じられた。企画当初、広島と淡路島は近いのではと思って大島家さんに手紙を書いた。それが最初のご縁だ。あれから15年が経ち、何度かお目見えもしたが、岡山 RSK 山陽放送の新社屋内能舞台の設計者として、大島家さんのご推薦を頂くとは夢にも思わなかった。



能楽堂ホール tenjin9 は、放送局の1階、多目的ホールの中に計画された能舞台だった。能楽堂の活用法として昨今、舞台を用いたコンサートや展示会も耳にする。「能舞台は神聖な場所。息子や娘たちと、50年ほど前に私たち夫婦の結婚式に使ったぐらいで・・・」と大島家の泰子さんはRSK山陽放送の人々にご説明された。住宅の中にお茶室をつくるときも、「お茶室はお茶以外のことには使わない」という人もいれば、「お客さんが来たときは泊まれるように」と注文を受けることもある。能舞台に上がるときには白足袋を履き、舞台上で間違いを犯すと切腹なんて話も残っているので、檜舞台の清浄さは計り知れない。そんな作法はさておき、能舞台を多目的に使うとき、構造的には大きな問題があった。

能舞台はそれ自体がひとつの楽器とも評される。桧の見事な床板に目を奪われがちだが、鏡板に反射した囃子方の音が、正面席に流れる向きに床板が張られる。最近では床下に甕がない舞台もあるが、お寺の鐘楼や剣道場の床下にも埋められる甕は、日本人の心の音を響かせてきた。反響させるためか吸音させるためか、甕の秘密はまだ完全には解明されていないらしい。三間四方の本舞台は、約6メートルの床梁で支えられている。中間に束を立ててはいけない。床板と垂直に大きな根太材が整然と並べられた喜多能楽堂などの舞台に対し、能楽堂ホール tenjin9 では40センチ径の松の丸太を井桁に組む形式とした。巖島神社能舞台に見られる古い造りを意識した。それだけ床梁が飛んでいると、当然床はたわみ、柔らかい造りとなる。足拍子が舞台全体で響く、まさに太鼓のような構造をしているのだ。

舞台に立った人だけが、ズシーンと大樹が倒れたような床板の響きと、住宅などの固いフローリングとは違うたわみを体感できる。そのため、多目的ホールとして使われるときは、井桁の大梁を固定して床がたわまないような仕掛けを施している。

江戸時代、将軍や藩主の祝い事では町入能が開催され、勧進能興行も許された。数千人規模の町民が、公演に足を運んだ記録が残っている。現代はどうだろうか。能舞台は能楽堂の中、能楽愛好家でなければあまり目にすることはない。神社の境内で、雨戸の閉まった舞台しか見たことがない人も多いのではないだろうか。能楽堂ホール tenjin9 は、全く能楽を観にくる積もりのなかった人にも、能楽堂に入ったときに感じる、祝祭の迫力を体験させてくれる。

9月20日、竣工後初めて、能楽堂ホール tenjin9 で能楽公演が行われた。喜多流大島家による能「西王母」。三千年に一度咲く桃の話である。三千年に一度の機会をありがとうございました。

《筆者紹介》 **田野倉徹也** 1978 生。
田野倉建築事務所 代表
主な作品：漫画家・山下和美邸、
にっぽん文楽組立舞台、
岩惣「洗心亭」等



chanoyumaptokyo.jp/advertiser/tanokurakentikuzimusyo/



『tenjin9』初の能舞台公演

能「西王母」シテ大島衣恵 2021年9月20日

太鼓 梶谷義男 大鼓 守家由訓 小鼓 久田舜一郎 笛 八木原周平

正式名称：RSK イノベイティブ・メディアセンター内能楽堂ホール『tenjin9』